

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■ 第5章「命」

5

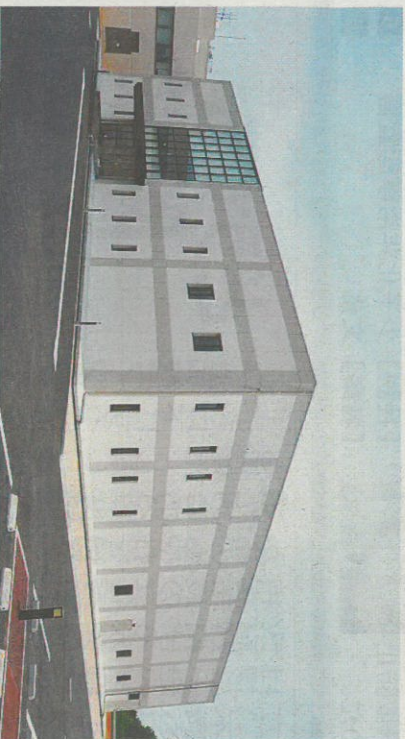
3月15日午前6時半ごろ、福島第一原発免震重要棟2階の緊急時対策本部では退避に向けた人選が始まっていた。中央の円卓近くでは、第一復旧班長稲垣武之竹(47)と第二復旧班長奥田史朗(56)を中心に復旧班員の輪ができていた。

誰が残る、誰が退避するのか、明確な基準はなかったが、若手社員は退避せると2人とも決めていた。床で仮眠していた復旧班計測制御担当の横山英治(37)は後輩に起こされた。

「横山さん、2F(第二原発)に退避ですよ」

横山は状況のみ込めなかった。

## 復旧班員の葛藤



# 「今は死ねないが」

朝方まで中央制御室で計器の復旧作業に当たっていて、ようやく仮眠が

取れたのだ。周囲を見渡すと同僚たちが既に荷物をまとめていた。どうやら仮眠している間に状況が悪化したらしい、と横山は思った。

横山は後輩2人を連れて免震棟を出ると、駐車場に止めてあった自家用車に乗り込んだ。

もつこには戻りたくない。バックミラーに映る免震棟を見ながら横山はそう思った。

稲垣と奥田の周りでは何人かが「残ります」と手を挙げていた。

福島第一原発の免震重要棟(東京電力提供)

「自分を出してほしいんですが」

班員の1人が退避させてくれ、と申し出た。

「駄目だ」

奥田は即座に断った。

「正直だな」と思いました。彼に機員は退避すると決め、稲垣に申し出た。稲垣は引き留めなかった。だき抱き抱きしてあげたが…」

機員は退避すると決め、稲垣に申し出た。稲垣は引き留めなかった。

対策本部を出る機員が最後に見たのは所長の吉田昌郎(56)だった。吉田は約15年前、機員が第一原発修繕課に所属していた時の上司だ。

吉田さんは第一原発の最期をみつろつとしていた。

一言、声を掛けようか。だが声を掛けださなくていい、もうここを出るの

電源復旧に向けて進めていた第一復旧班で電気設備を担当する機員

「残ります」と手を挙げていた。爆発で噴出し、現場に出ている班員が二度と見ることがない免震棟の退避用バスに乗り込むと、機員は電気設備担当としてやるべきこと(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 国分伸矢)